



自閉スペクトラム症児の障害特性の変容に関する発達的研究

人文科学系・人間科学領域

狗巻 修司

准教授 INUMAKI Shuji

博士(福祉社会学)(京都府立大学)

■研究キーワード 自閉スペクトラム症,共同注意,相互交渉,反復的行動,こだわり

■主な所属学会 日本発達心理学会,自閉症スペクトラム学会,日本特別ニーズ教育学会,日本保育学会,日本特殊教育学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.ba18e296b90e3752520e17560c007669.html>



Nara Women's University



研究者総覧

研究概要

自閉スペクトラム症のある幼児・児童を対象として、主に以下の2つ視点から、その障害特性の変容プロセスについて「発達」をキーワードにして研究を行っています。児童発達支援センター・幼稚園・特別支援学校などを主なフィールドとして、観察法や実験法を用いて調査を実施しています。また、障害のない乳幼児の観察や実験もあわせて実施し、自閉スペクトラム症児にみられる障害特性を明らかにするとともに、必要となる支援のあり方について検討しています。

1. 共同注意スキルにみられる障害特性とスキル獲得に必要となる支援内容に関する検討
2. 反復的行動(こだわり)や強度行動障害の生成過程と必要となる支援内容に関する検討

これらの研究結果を実践にフィードバックしています。



乳幼児の行動観察・発達検査



大学院附属相談室での
自閉スペクトラム症児への発達支援

アピールポイント

ヒトは他者とのコミュニケーションなしに生きていくことができない存在です。自閉スペクトラム症児の障害特性を検討することで、ヒトがもつコミュニケーションの特徴というものが見えてきます。このような検討を行うことで、障害のある状態を定型発達(いわゆる「普通」と区別して捉えるのではなく、障害のある状態と「普通」と呼ばれる状態のつながりを考えることができます。

また、実践現場で研究を行うことや、実践者とのカンファレンスを通じて、研究結果をフィードバックすることができます。実践者とのカンファレンスは、目には見えない乳幼児や自閉スペクトラム症児の「要求」をどのように解釈し、支援の内容をより豊かにしていくのかについて考えるよい機会となりますし、研究を行ううえで必要となる新たなアイディアが生まれることが多いです。施設や学校での研修や、保育士・教師などの専門職を対象とした研修(セミナー)を積極的に引き受け研究結果をフィードバックするようにも心がけています。

そして、大学院附属相談室において、自閉スペクトラム症児とその保護者を対象とした支援を実施しています。自ら実践に関与することで基礎的な研究から明らかにされていることと、実際のお子様の姿とのつながりを見出すこともあります。相談室での実践は比較的長期間となりますので、お子様一人ひとりの課題に向き合い、保護者の悩みに寄り添いながら、その発達を支援しています。相談室での支援をベースに図書を出版しています。

